

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

オラン・アスリと開発

信田敏宏 (国立民族学博物館准教授)

オラン・アスリという先住民をご存じだろうか。オラン・アスリとは、マレー半島に暮らす約 18 の先住民の総称で、現在の人口は約 15 万人である。アニミズム的な信仰を持つ人びとが多く、熱帯のジャングルで、サルやイノシシの狩猟、ラタンや沈香などの森林産物の採集、陸稲やイモ類の焼畑耕作などをしながら生きてきた森の民である。観光ガイドブックにはタマン・ヌガラに行けば狩猟をするオラン・アスリに会えるということが書かれているし、キャメロン・ハイランドへ向かう道沿いにもオラン・アスリの集落を見つけることができる。

しかし、オラン・アスリが暮らしているのはこのような周縁部ばかりではない。マレーシアの都市部に暮らす人びとにとっては、オラン・アスリは決して身近な存在ではないようだが、実は意外と近いところでも彼らに出会うことができるのである。

例えば、クアラルンプール北部のゴンバックには、オラン・アスリ博物館やオラン・アスリの人びと専門の病院があり、その周辺にはオラン・アスリの人びとがマレー半島各地から集まってきて、生活している。また、クアラルンプール北西部のブキット・ランジャン地域の都市再開発地区には、赤色の屋根の家々が整然と立ち並んだデサ・トゥムアンというオラン・アスリの居住地もある。

マレーシアの玄関口であるクアラルンプール国際空港 (K L I A) の近くにもオラン・アスリの集落が点在している。その一つ、ブキット・タンポイ村は、空港から車でクアラルンプール市内に向かって走り、最初の料金所を過ぎてすぐのジャンクションをスレンバン方面へいく高速道路の右手にある。小高い丘の麓に家屋が立ち並んでいる様子が車窓から一瞬見える。

ブキット・タンポイ村は、村びとたちが政府を相手

に訴訟を起こしたということで、オラン・アスリの世界では有名な村である。1995 年、K L I A に連結する高速道路が計画され、ブキット・タンポイ村の土地の一部が収用された。半強制的な土地収用に不満を抱いた人びとは、非政府組織 (NGO) の支援を受け、翌年、連邦政府や州政府等を相手に訴訟を起こし、約 14 年におよぶ裁判の結果、勝利を得ることができた。しかし、裁判に勝利したとはいえ、現在でも、高速道路は依然として村の真ん中を突っ切ったままであり、村の人びとは、日々、飛行機や車の騒音に悩まされている。

このような事例はブキット・タンポイ村ばかりではない。1990 年代以降、マレーシアの開発の波はオラン・アスリが暮らす周縁部にまで及ぶようになり、彼らの居住地がゴルフ場や空港、ダム、リゾート開発などの候補地となることが多くなっていった。オラン・アスリが生きてきた森は失われつつあり、これまでのような森の民としての生活はできなくなってきている。都市部へ出稼ぎに出る人びとも多くなるなか、オラン・アスリは今、自らのアイデンティティまでも失いかけているのである。

< 筆者紹介 >

1968 年、東京都生まれ。東京都立大学 (現・首都大学東京) 大学院社会科学部博士課程満期退学。博士 (社会人類学)。東京都立大学人文学部助手、国立民族学博物館助手を経て現職。専門は社会人類学。開発、イスラーム化、エスニシティなどをテーマに、マレーシア先住民オラン・アスリを対象とした人類学的研究を行っている。最近では、NGO 活動とコミュニティーとの影響関係に関心を持ち、研究を進めている。著書に『周縁を生きる人びと オラン・アスリの開発とイスラーム化』(2004 年、京都大学学術出版会) などがある。

The Daily NNA

トライアル受付中!

電機・電子・IT ニュース